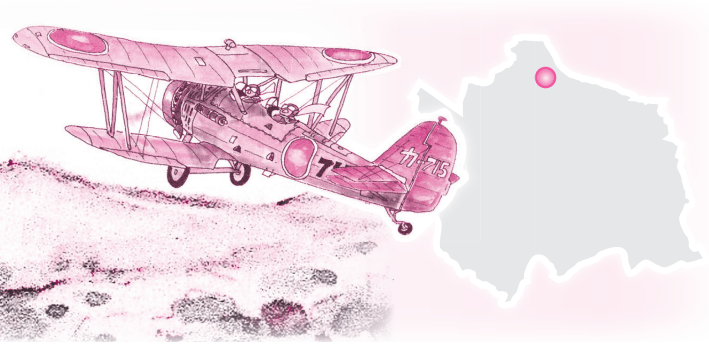
予科練 平和記念館だより



予科練平和記念館整備推進室では、予科練や海軍に関するお話しや写真を集めています。ご存じの人はぜひご一報ください

高く高く、突き抜けるように青い空を見ると、なぜか子どもに戻って走り出したい気持ちになるのは、あのころ今よりも空を見上げることが多かったからなのでしょうか。11月3日は文化の日ですが、晴れる確率が高い日として知られています。また、昭和21（1946）年に、現在の日本の基礎となっている日本国憲法が公布された日でもあります。62年前のこの日も突き抜けるような青空だったのだろうか、50年後100年後もこの青空は見られるのだろうかと、ふと思ってしまう今日このごろ、皆さんはいかがお過ごしでしょうか。

今月、来月の二か月にわたって、阿見町在住の元予科練習生をご紹介します。

●翼なき予科練

森田辰徳さん（80歳　うずら野在住）は、予科練平和記念館整備推進応援隊の一人として、昨年より夏季特別展などで活躍してくださっています。「実直」という言葉が真っ先に浮かぶような風貌と、きびきびした動作は、戦後警視庁に勤務していたころからなのでしょうか。ゆっくりと、わかりやすい言葉を選んで話してくださる森田さんの若き日の思い出は、まるで音のない映画のように、言葉の奥から静かにあらわれてくるような印象を受けました。

昭和3（1928）年、東は阿蘇山、西は有明海にはさまれた熊本県北部の城北村（現在の山鹿市）に5人兄弟の4番目として生まれた森田さんは、国民学校高等科卒業後の昭和19（1944）年、16歳で予科練（海軍飛行予科練習部：海軍の少年航空兵養成制度）に志願しました。このころ日本は連合国軍の圧倒的な戦力の前に消耗戦を続け、各地で玉砕が相次ぎ多くの人命を失っていました。前年には予科練習生の教育をおこなっていた土浦海軍航空隊（現在の陸上自衛隊武器学校）で撮影された映画『決戦の大空へ』が封切られ、主題歌『若鷲の歌』が大ヒット、パイロットを目指す予科練習生は七つボタンの制服のスマートさもあり、当時の少年たちの憧れとなって大量採用に一役買うことになります。

▲七つボタンの制服を着た森田さん

「・・・予科練というのは憧れでしたからね。若い子のほとんどはそうでしたね。なかなか受からなかったんですそのころは。・・・最初は整備兵としての採用通知がきたんですよ。その後訂正されて予科練という採用通知がきた。正直言って喜びましたね。整備兵だと思ってたところ飛行兵の通知がきたんで、それこそ飛び上がるような喜び方、ということですね。・・・母親のほうはちょっとさびしそうでしたよね。父は結構喜んでくれました。一緒になって。」

同年6月1日、第22期乙種飛行予科練習生1万1723人の一人となった森田さんは、基礎訓練を終えた後長崎県の大村湾に面した大村海軍航空隊（現陸上自衛隊大村駐屯地一帯）に行きます。戦局がますます悪化した10月、窮地に立った日本はとうとう非情な作戦を開始しました。爆弾を積んだ飛行機ごと敵に体当たりする特別攻撃です。森田さんたちのいた大村海軍航空隊も特攻隊の基地となり、連日のように特攻機が飛び立つようになりました。予科練習生たちは、本来の学業や訓練は二の次で特攻機整備の仕事にかりだされ、パイロットの卵であるはずが『翼なき予科練』となっていきました。

「（特攻機は）最初のうちは九六戦（九六式艦上戦闘機）が多かったですが、あとはほとんどゼロ戦になってきましたね。（作業以外の人は）滑走路の両側に並んで送るんですけどね。「帽ふれー！」って帽子振って飛び立っていくんです。一番多いときで午前・午後あわせて30機くらい送ったこともあります。・・・（見送るのは）20人かそこらですよね。映画に出てくるように50人が両側に並ぶなんてことはないですよ。10人かそこらで送るだけです。それこそ下を向いて操縦桿もって飛んでいく人と、手を振りながらね、笑って出て行く人とあるわけですよ。「あ、これは帰ってくるな」なんて言いながら送ったこともありましたけどね。やっぱりあの、それこそ下向いたまま離陸する人が多かったですよね。」（次号に続きます）